

「一流になりなさい。それには、一流だと思ひ込むことだ」という本からです  
部下を成功させる人が上司だ。力相応の指示を出してあげなさい。

「コーチの意味を知っていますか。乗客を目的の場所まで連れて行く人、馬車の御者のことを、コーチと言います」  
早稲田大学ラグビー部の名監督として、1987 年、早大ラグビー部を日本選手権優勝に導いた鬼のキモケン、故木本建治さんと対談したのは、その二日後でした。

コーチというのは、自分の理論を押しつけるのではなく、一人ひとりの選手を目的の場所、つまり望む成功へと導く役割です。木本さんは、そう語りはじめました。

多くのリーダーは、コーチの意味を取り違えることが多い。自分の意志の実行を、仕事だと考えてしまうと語ります。「しかしそれは、確固たる信頼関係ができた後のことですね。まずは、一人ひとりの目的地を聞き、そこに導くことを日常行なうべきなのです」

力相応の指示、その言葉がすぐに浮かんできました。船井先生に二日前に言われた言葉です。「部下は全員成功したい。君を応援したいと思っている。なのに動かないとすれば、君が力相応の指示を出してないからだよ」そう言われたのだがと、船井先生の言葉を伝えてみました。「そのとおりですね。部下を成功させる人を上司というのです。上司が成功することは、その次にくる。いや、考えてはいけませんよ」

翌日、船井先生の待つ高輪のホテルへと向かいました。仕事の報告があったのですが、木本さんから言われたことを伝えたい、その思いがすべてでした。「部下を成功させることだけ考えればいい。そのとおりだと思うよ。みんな成功したいんだからね」なぜ船井先生が、仕事の失敗を叱責しないのか、ようやくわかってきました。「部下の失敗は、その部下を成功させてあげられなかった上の人間の責任だよな。申し訳ないなと思っても、叱ることはない」すべての原因は自分にある。

その言葉の意味も同じことなのです。まさしく、あらゆる原因は自分にあると考えれば、さまざまな問題の解決の糸口は自ずと見えてきます。「すべての部下は成功したい。私の役に立ちたいと思っている。そのことが、信じられるようになりました」

その私の言葉に、先生は少し笑ったように見えました。「そのことを信じられる人間が、リーダーであり上司なんだ。そう信じられないと、自分が苦しくなる」確かにそうです。なぜ？ どうして？ なんてあいつは？ そう考えることは、あまりに非生産的ではないか？ 「不信は最大のコスト、というだろう。不信感をもっているときの自分は、何か間違っているときだと思えばいいよ」一人ひとりに、力相応の指示を出す。それは、大変なことではありますね。思わずそう口にする、即座に船井先生の言葉が返ってきました。「いや簡単だよ。みんなを好きになればいい。愛情をもてば、すぐにできるよ」船井幸雄の哲学が、そこに凝縮しています。リーダーの真髄でもあります。「何かやってもらって、トンチンカンな奴もいるよな。そのときは、顔をじっと見て、そうかなあ？ と首を傾げればいいよ」そうすれば、自分で気づいてまた直してくる。そのやり取りが、君と現場の信頼になるからね。

ホテルを出て、高輪の坂を下りながら思いました。あの、そうかなあ、は考えてみれば、俺も随分と言われているなと、気づきます。思わず、ワハハと笑い出していました。

一人ひとりに、力相応の指示を出す。それは、大変なことではありますね。思わずそう口にする、即座に船井先生は、どんな言葉を返してきましたか？

( )